



岐阜市は斎藤道三や織田信長など名高い戦国武将が活躍した舞台です。道三・信長は何故岐阜市を選んだのでしょうか？英雄たちが欲しかった岐阜！その歴史を作ってきた武将や武士団、彼らの知られざる活躍と一緒にひも解いていきましょう。身近なところにある歴史が、新たな気付きにつながるかもしれません。

斎藤義龍・龍興の城



岐阜市ぎふ魅力づくり推進部 文化財保護課 特任研究員 内堀 信雄

プロフィール
昭和34年 栃木県宇都宮市に生まれる
昭和61年 名古屋大学大学院文学研究科(考古学)卒業
岐阜市教育委員会にて信長公居館跡発掘調査などを担当。
主な著書
『東海の名城を歩く 岐阜編』(共編、吉川弘文館、令和元年)
『戦国美濃の城と都市』(高志書院、令和3年)

大河ドラマ「豊臣兄弟」では、強敵織田信長が迫る中、古参の重臣たちを抱え苦悩しつつも立ち向かう若き稲葉山城主・斎藤龍興の姿が印象深く描かれていました。道三に比べて注目されることが少ない龍興とその父・義龍ですが、今回は彼らに関係したとみられる城をご紹介します。

1 斎藤義龍

義龍は1554年3月以前に道三から家督を譲られますが、1555年11月、稲葉山城内にて弟2人を殺害し道三を追放します。この時道三は大桑城(山県市)に逃れたと推定されています。半年後の1556年4月20日、義龍は長良川の合戦で道三を討ち取ります。娘婿の織田信長は道三救援に向いますが、義龍軍に行く手を阻まれるなどして撤退せざるをえませんでした。

2 義龍関連の城

義龍が稲葉山城主だった時代、信長が美濃を攻めた記録は長良川の合戦時以外見当たりません。濃尾国境地帯に伊木山城(各務原市)などの堅固な城が存在したことがその理由だろうと推定されています。伊木山城の発掘調査では斎藤氏時代の石垣が見つかっており、信長の攻撃に備えて義龍が築いたとみられます。この城がならみをきかせていたため鶴沼城や猿啄城などを居城とする国境地帯の小領主た



写真1 伊木山城から東方の眺望

3 斎藤龍興

1561年5月11日に義龍が亡くなり、息子龍興が稲葉山城主になると信長の美濃侵攻が始まります。5月13日には西美濃に侵入、翌14日には龍興方の軍勢が墨俣城(大垣市)から出陣しますが、森部合戦(安八町)で龍興の重臣2人が討ち取られます。この時、墨俣城が信長軍に奪われたようです。その後も西美濃方面での戦いが続きますが、翌1562年2月に龍興は信長と和睦し、墨俣城などは龍興方へ戻ります。

4 龍興関連の城

岐阜城の立地する金華山主尾根から東方に延びる2本の支尾根(鼻高ハイキングコースと近世絵図記載の「松田尾」)には斎藤氏時代の石垣で護岸された砦が残されています。これらの砦は、1565年以後目前に迫る信長の脅威に對抗して龍興が石垣に改修したものとみられます。

ところで、道三が追放した美濃守護土岐頼芸の居城・大桑城の西

尾根には城の中心部では見られない土塁を用いた曲輪が残されています(写真2)。城郭研究者の佐伯哲也氏は、この曲輪は1565年頃に信長の東美濃侵攻と関係して龍興方の武将が築いたのではないかと推定されています。その可能性に加えて、前年1564年に竹中半兵衛が稲葉山城を奪取した時、逃げた龍興が祖父道三の先例にならい大桑城で再起を図ったという見方もできるかもしれません。



写真2 大桑城の土塁を持つ曲輪と佐伯哲也氏

次回(2026年6月号)でお楽しみに

*【参考文献】●木下聡「0000」斎藤氏四代 ミネルヴァ書房 ●石川美咲「0004」斎藤義龍・龍興【戦国武将列伝6 東海編】戎光祥出版